

葉が数多く書きしるしてあります。回復の望みが極めて薄いことを知っており、悦子は、最後まで立派に生きることによってのみこの感謝の気持ちを表せるのだと確く信じていました。死を予感しての長い闘病生活を支えていたものはこの信念でした。

死の十五時間くらい前に書かれたと思われる悦子の最後の文字も「二十三日さようなら皆さんどうもありがとうございました」という感謝の言葉でした。

創生の喜びを与えてくれるという活け花・織物・修士論文のテーマであった頃の織物産業の研究、結婚、新しい家庭の設計など、悦子の生きかいのすべてを中断させ、あるいは放棄させた運命の苛酷さを知っていた悦子が宗教的安らぎに入ることができたのも皆様方への感謝の気持ちからでした。周囲の人々に対する感謝から神に対する感謝へと入ってゆけた悦子はある意味で幸福でした。喀血した後、出血が止らず、徐々に窒息してゆくという苦しい最後であったにもかかわらず「さようなら」といって息絶えて後は眠っているかのような安らかな表情をしておりしました。

最後まで立派に生きたと私どもは信じております。そして、そのように生きることができましたのも、すべて皆様方のおかげであることを思うとき、私どもは感謝の言葉で言い尽くせぬ気持ちが湧いてくるのを覚えますほんとうにありがとうございました。

書面ではまことに失礼ですし、言い表わせぬもどかしさを感じますが、悦子の遺稿の一端をお伝えし、また私どもの気持ちを述べさせていただきました。

最後に皆様方の御健康と御幸運とをお祈りし、社会のために、あるいは御家庭のために一層の御活躍を期待いたします。

昭和四十年四月二十二日

矢 口 和 代

永田さん、もうあなたが息を引きとって四月、現世では何もなかったかの如く静かに時を刻んでいます。新聞は、あなたが最後まで雑誌にまで戦争反対、平和解決を主張していたベトナム戦火の益々拡大していくことを報じ、無為の死者数を発表しながらも表面全く何もないかのように一日が過ぎていきます。

あなたの生命は、私達に―見平和らしき社会で平穩無事に自己の安全のみ

に生きることではなく、その底を流れているものゝ根源を見究め、その中で我々歴史を創るものゝ役割といったものを生々しい教訓として与えてくれました。私達の平凡な毎日の生活の中にあなたの生命が通っています。既にあなたは、個人的な存在でなく大勢の人の心の中に存在することになったのです。

人間は、いずれその肉体を失わなくてはならない、はかない存在でしょうが、あなたの事を考えると口惜しい程短いものでした。僅か24歳の誕生日を二日先に遊ってしまったという物理的な短かさはばかりでなく、人生の幸福の一つほどどんな人生が拓かれるかわからないから最大とは云わなかった。)であると喜しそくに話してくれた結婚も目前に放棄して遊ってしまった。創造の喜びを与えてくれると云って次々と計画を立て実行していった手織織物、修士論文もそのような織物と大いに関係のある界の織物産業についてとしたのにこれらを全て中断し放棄して遊ってしまった。しかしその物理的短かさに反比例するように生と厳しく闘い、精一杯立派に生きた人生であったと多くの人が認めています。安易に生を否定し死を夢見る時、一瞬たりともそのようなことを考える自分が申し訳けなくさえ思うのです。あなたの絶筆にもなる“生きること。最後まで力強く生きること！”に捉えられます。

さて、私があなたをより親しく知るようになったのは、お茶大卒業後でしたね。お茶大当時は妙に粋というよりは鑑をつけていたように感じていたのですが、東大に通うようになってあなたの慫慂された最も人間らしくそして女性らしいナイーブな側面を知るようになってからです。そしてその最大のチャンスは沖縄旅行でした。沖縄出発前の一ヶ月間、七月中は連日炎天下を精力的にパトロン探しに、あるいは渡航手続きにと掛けずりまわったものです。そしてつかないパトロンに種々名案をもち寄っては尚も執拗に会社などを訪ね、その場句は切口上で婉曲にその旨を断られた口惜しさを氷水で慰め合ったものです。沖縄入りしてから全てもこんな調子で苦労は多く、しかも珍談奇談の入り混る二十日間でした。その間は旅行後僅かもヶ月程で発病するなど思いもよらないエネルギッシュな活躍でしたのに。発病してからも会う度毎に沖縄の思い出を楽しく、楽しく語っておりました。病の後半の死に直面した苦悩は、死以上に激しく、激しかったようです。最後まで彼女はこんな言葉を実践していたのでしよう。

「窄き門に入るために力を尽せ」 ルカ伝 13章 24節